

ゼミナールの肖像4：宮沢健一ゼミナールとラグビー部

一橋大学で得たもの

大学紛争時代という特異な時代に学園生活を送って

進藤 孝生

日本製鉄(株) 代表取締役会長(昭 48 経)

はじめに（時代的背景）

<戦争への反省と二つの価値観>

・我々が在学した1969～1973年は、1945年の終戦から4半世紀を過ぎた頃。戦後生まれで戦前の社会を知らぬ我々には、自分たちの生きている時代を歴史の勉強で形式的に知ることはできても、実感として理解することはできなかつたような気がする。しかし、今、70歳となり卒業後約半世紀を過ぎ、当時の時代をその後の半世紀と比較することにより、少し客観的に見る事が出来るようになった気がする。

・私は昭和24年9月秋田市の生まれである。従って戦争の記憶はない。ただ戦争の残したものは見たことがある。母に連れられて汽車で旅行した時に、ある駅で汽車が止まり窓から駅のプラットホームを眺めていた時に、茶色い軍服を着た気のいい進駐軍の兵士が話しかけてきた。私は怖くなって泣き出した記憶がある。母が怖い人ではないよと言ってくれてとりなしてくれたが、子供心に違和感を感じたのであろう。又、秋田の田舎でも秋田駅の近くなどでは傷痕軍人が路上に座って物乞いをしていたし、中にはアコーディオンを弾いていた人もいた。小学校の先生からは国が生活費（恐らくは軍人恩給）を見ているのだから恵んでやる必要はないと教えられた。

・戦争への反省は社会の隅々にまで浸透しており、「日本は戦争に負けてよかったのだ」等の発言をよく聞くほど、あの戦争への国民的な悔恨と、民主主義・平和主義の考え方を広めようとする意識は非常に強かった。その中で、米ソ冷戦の政治構造があり、戦前弾圧されていた社会主義思想が大きく開花したことから、社会主義への憧憬も強かった。

・しかし、一方では、戦前の考え方、伝統的な日本の保守思想も残っており、小学校の先生の多くは戦前の師範学校での教育を受けた人々であり、校長・教頭など指導的な立場にある先生たちは、日々の教育、生徒たちとの日常の接触の中で、日本の伝統的な価値観を伝えていた。

<マルクスとアメリカ>

・このような戦後の時代に小学校・中学校・高等学校の教育を終えて、大学に入学した



我々の学生時代の背景を一言で言うならば、「マルクスとアメリカ」、これが我々世代、少なくとも私の一橋大学時代の背景であったような気がする。

- 「マルクス」とは戦前から敗戦に至る歴史への反省からの、社会主義へのあこがれ、であり、他方、「アメリカ」とは圧倒的な物量と科学技術、そして機能的・プラグマティズムの考え方で、豊かな社会を築いたアメリカへのあこがれであった。マルクス経済学 vs 近代経済学、大塚久雄が「社会科学の方法：ヴェーバーとマルクス」で書いた二つの考え方の相克の中で、我々世代は学生時代を送ったのである。

1. 入学前の世相

- 私は昭和 44 年（1969 年）4 月に一橋大学経済学部に入學したが、ここに至る経緯には若干の紆余曲折があった。もともとは東大文科一類を希望していた。秋田県立秋田高校でラグビー部に所属し有能な指導者とチームメイトに恵まれた私は、花園での全国高校ラグビー選手権大会に、高校 2 年と 3 年の時の 2 回連続して出場を果たし、それぞれ準決勝、準々決勝まで進んだ。高校 3 年の時は 3 月の大学入試の二か月前である 1 月まで花園でラグビーをしていた関係もあり、浪人覚悟で東大だけを受験し、不合格となって次年度を目指し東京お茶の水の予備校（駿台高等予備校）で受験勉強を開始し、捲土重来を期していたのである。

- しかし、この年、東大医学部の研修医待遇改善運動をベースに、学生の誤認処分などから始まった東大紛争は、戦前の名残を残す封建的な医局制度や、他学部をも巻き込んだ教育・研究制度にも拡大するとともに、更に「何のための学問か」「何のための大学か」「何のための経済成長か」を学生が大学当局、社会に問いかける形で、東大のみならず全国の大学に広がった。

- 学生運動家は多くのセクトに分かれ、大学側との交渉手段として学生ストライキが蔓延し、大学の授業はできずデモと団交、そしてセクト間抗争に明け暮れた。セクトのほとんどは究極的な目標を共産主義革命に置くなど、運動の目的も良くわからないものであった。

- 東大紛争は激化し、別の問題で起こった日大・明大の紛争も加わり、お茶の水周辺も学生のデモ、学生と警察の衝突などが日常となり、我々がお茶の水の予備校に行くと、駅周辺には前夜使用された催涙ガスが残っていて、予備校の講義を受けながら出る涙をぬぐっていた記憶がある。

- 東大紛争も年が明けて昭和 44 年の 1 月、我々の受験の 2 か月前であるが、セクトとは別の一般学生が中心となり、各学部の学生自治会と大学当局との交渉が行われ終息の運びとなった。この団体交渉は東大構内が過激派のセクトに占拠封鎖されていたために、秩父宮ラグビー場で、当時の加藤一郎東大総長代行と 7 学部学生代表との間で行われた。我々受験生も大きな関心をもってテレビのニュースで見っていたのを記憶している。



- この時に各学部自治会の委員長として確認書に署名した学生リーダーには、その後、名を成した方が多い。医学部代表が今井澄氏。卒業後、医師となり無医村での医療に従事し、その後社会党代議士となる。経済学部代表が町村信孝氏、北海道知事の町村金五氏の次男で卒業後通産省を経て自民党代議士となり、文部大臣・外務大臣となった。法学部代表が保倉裕氏で、八幡製鉄に進み、その後新日鉄となって私も若いころ先輩として教えることになった方である。

- しかし、事はここで終わりはしなかった。この団体交渉はセクトに所属しない一般学生とのものであり、過激派セクトの多くは安田講堂を占拠し「東大粉砕」を叫んでいた。時の佐藤栄作政権は機動隊をもって占拠学生を排除し、多くの破壊と混乱の中で東大紛争は終わったのである。しかし、この混乱の中で東大入試は中止となった。歴史上初めての事であったと聞いている。

- 浪人までして合格・入学を期していた東大の入試がなくなったことで、私は大きな軌道修正を迫られることとなった。多くの友人は京都大学を受験したが、秋田生まれの私は、正直言って関西まで行く気はなかったし、大学紛争を横で見ている学生や教授、メディアの発言・主張を聞いたり読んだりする中で、社会のあり方、経済のあり方、所得格差の所以、国民経済の運営、豊かさ・幸福の実現方策などの方に関心が移っていた。法律よりも経済の論理を学びたくなっていたし、何よりも受験勉強は一年で良い、早く大学に入って読書もしたいし社会科学を勉強したいと思うようになっていた。これが私と一橋大学の接点の始まりであった。

2. 一橋大学入学と7クラス（ドイツ語）

- この年、1969年は東京大学と東京教育大学（現筑波大学）で入試中止となった。両大学を受験しようとしていた学生数は定かではないが、その定員からして恐らく5000名は下らない多くの学生が他大学に上乘せする形で受験するわけで、競争は一般的にかなり厳しいものになることが予想されたし、特に東大受験生が流れそうな京都大学や一橋大学、東工大などは実際そうであったと思う。

- 一橋大学の入学試験は平穏に行われた。一次試験と二次試験があり、どちらかだったか忘れたが、試験監督が当時「未来学者」としてよくテレビに出ていた坂本二郎教授であったことを記憶している。補助者として坂本教授についた、多分大学の事務官の方だったと思うが、我々受験生に対して「今年、東京地区の国立大学で平常通り入学試験が出来たのは、本学と東工大・・・」としみじみと語ってくれたことを記憶している。わずか20～30秒位であったが、なぜどうしてそんな時間があったのか不明であるが、受験生もしんみりと聞いていた記憶がある。

- 入学式は西順蔵学長代行の下で挙行されたと記憶している。一橋大学内でも全国の学園紛争の流れの中で活動家はいるらしく、ヘルメットとゲバ棒スタイルの学生が兼松講堂



の前にいることはいて、郷里から上京した父母は驚いていたが、全体の雰囲気は概ね華やかなものであった。ラグビー部の先輩たちも部員勧誘の活動をしており、私はその日に入部を決めた。

- 授業が始まった。一学年は専攻した第二外国語に従ってクラス分けがあり、私は 7 クラス（ドイツ語）となり、語学の授業も始まった。学園紛争のため混乱の中で入学してきた連中ではあったが、挫折感・屈折感ではなく世の中の動きは動きとして受け止めて一つの安堵感の中で授業に入っていた。ただ、結果論であるが一学年終了時、翌年 1970 年の東大入試が再開された時に、数人が本学を退学して受験して東大に移ったことを考えると、一部に本学になじまなかった人がいたことも事実である。

- 授業は語学が中心であったが、ドイツ語の文法中心の授業のほか、いきなり小説を読む授業もあった。ドイツ語では、フランツ・カフカの「変身」、英語ではウィリアム・スタイロンの「ロング・マーチ」など、それまでの受験語学とは違った感覚で勉強した。いずれも訳本は出ていたか、そう遅くないタイミングで出たのだが、それに頼ることなく真剣に原文に取り組んだ。

- 語学のクラスはその後の同期友人関係の基盤となった。特に一橋大学は法・経・商・社の 4 学部全部に跨ってのクラス編成となるので、色々な方面に進んだ人が多い。財界・官界・政界・法曹界・学界・ジャーナリズムなど。入学時点では知る由もなかったが結果論で言うと、皆、相当優秀で個性的な人材であった。石山照明は一緒に新日鉄に入り原料畑を歩み最後は日本電工の社長になったが、経済学部でありながら小説家志望で机の上には常に原稿用紙が 20 センチ位積んであった。よく懸賞小説に応募していた。一木剛太郎は法学部で、あの学園紛争の混乱期に 1・2 年生時代を送ったにもかかわらず、3 年生の時に司法試験に合格した。涉外弁護士として活躍する傍ら、日本司法支援センター（法テラス）の中心として社会貢献面でも活躍した。菱田健次も法学部。ハンドボールの名選手であったが弁護士・税理士となり、出身地の京都に帰り京都府議を 4 期務めた。岡田円治は経済学部。NHK で活躍後、如水会の理事事務局長を務めた。本村凌二は社会学部で西洋史専攻、東大大学院に進み、ローマ史の大家となり東大教授となった。馬・競馬への造詣も深く、又、石原裕次郎論の著書もある。ちなみに、同じクラスではないが、小泉内閣の経済財政政策担当大臣だった竹中平蔵、三菱商事から NHK 会長となった上田良一、歌手でタレントの山本厚太郎も同期で、山本は学生時代から「走れコウタロー」を歌っていた。

- 東京出身以外の多くの学生は、小平周辺の地域に下宿していたが、私は小平構内にある一橋寮で学生生活を始めた。今は取り壊されてもうないが木造の建物が東西南北の 4 棟、一部屋 4 人で二階建て作りのベッドが 2 組、窓際が 4 つに仕切られていてそれぞれに椅子と机があった。朝と夜の食事が付いていた。朝はうどんであった。油揚げと刻んだネギだけが上がっているほぼ素うどん。座って食べるが駅前の立ち食いそば屋のイメージである。冷房はなかった。暖房は各部屋にひとつの石炭ストーブ。寮の外に石炭置き場があり、足



りなくなると 4 人のうち誰かがバケツとシャベルをもって取りに行っていた。火力はあり冬寒い思いをすることはなかった。

• 学生はどんな生活を送っていたのか。新入寮生がはいり 4 人がそろると二年生が部屋で歓迎コンパを開いてくれた。缶ビールや安い日本酒・ウイスキーとつまみを買ってきて部屋でやった。自己紹介から始まってカラオケもなかったが歌も歌った。日々の暮らしは全くの自由。常に分厚い本と鉛筆をもって読書をする人もいれば、ほとんど授業に出ずにアルバイトに専念する人、せっせと授業に出てよく勉強する人、学生運動に没頭して寮内をオルグして回る人などがいた。ただ、総じて寮生は経済的には余裕がなかった。一度寮内でかなりの規模の盗難事件が発覚した。私も高校卒業時に学校から表彰を受けその記念品として「広辞苑」を頂き、部屋の中の本棚に置いていたのがなくなっていたのに気が付いた。寮生大会が開かれ犯人の学生が皆の前で「自己批判」したが、犯人は一人だけではなかったのだろう。盗難品が戻ったと言う話はあまり聞かなかった。私の広辞苑も戻らなかった。学園紛争で警察権力へ反発する気分は強かったから学生自治による寮運営の建前もあり、窃盗事件として警察に連絡することはなかったのではないかと。明らかに窃盗罪であり、これはこれで問題なのではあるが。これに限らず寮内では人の自転車も鍵がなければ自由に使って返しておくような気分もあったことは事実である。

3. 小平（1年生・2年生）での生活

(1) 学生大会とストライキ

• 全国に広がった学園紛争へ対処するため、政府はいわゆる大学管理法の制定に入った。大学の自治への侵害であるとして一橋大学でも学生大会が頻繁に開かれ、クラス代表が中心になってクラス討論が開かれたりした。デモなども企画され、当時のベトナム反戦などの流れもあり、全学が学生大会の決議に従ってストライキに入った。4月の末か5月のことであった。これ以降、大学の一部校舎が活動家によって封鎖されるなど、学生のストライキは、11月下旬まで延々と続くことになる。大学管理法自体は8月に自民党の強行採決によって成立し、これ以降学園紛争は下火になっていった。

• ストライキは5月から夏休みを挟んで11月下旬までの足掛け7か月間続いた。この間授業も試験もなく、私のような所謂「一般学生」は、個人的な読書、語学自習、クラスや寮の友人仲間で組織された勉強会（自主ゼミ）、司法試験等資格試験の勉強、クラブ活動、そしてアルバイトなどに明け暮れた。

• 私は読書、ドイツ語、自主ゼミ、ラグビー部の練習、アルバイトが日課となった。入学時に私は「読書録」と銘打って、A4判のルーズリーフノートを準備し、一冊1枚を原則に読み終わった本の題名・作者・感想を書くことを始めた。卒業までの4年間で500冊を目指したが、記録自体が2年しか続かなかつた中で75冊で終わっている。内容は乱読の域を出ないが、社会科学方法論、経済学説史、ケインズ、マルクシズム、内外の小説などで



あった。ドイツ語は市販の初歩の文法参考書を読み終えたことになっている。自主ゼミは寮の同室の2年生が「資本論を読もう」と言って、「資本論研究会」ができた。専任講師の松石勝彦先生にチューターになってもらって、週一回寮の集会所の一室で始めた。大月の翻訳本3巻5分冊、ローゼンベルグの資本論註解など買い揃えて参加したが、結果的にはよく理解できずに1巻を読み終えた所で断念し、「資本論研究会」も立ち消えになった。

- ラグビー部の練習だけは週一回の休みの日を除き毎日行った。練習は国立の中和寮横のグラウンドで午後3時半から5時半までであったので、小平から電車で国分寺に出て、それからバスで通った。電車とバスの定期券を持っていた。アルバイトは週一回の家庭教師。寮内ではガードマン会社が競輪場警備のためのアルバイト要員を頻繁に募集していた。

(2) 授業再開と1年次の試験

- ストライキが如何にして解除となり授業が再開される運びになったのか、私は不覚にもその事情を知らない。多くの一般学生はそうであったと思うが、ただ、小平の構内に目的は定かではないが機動隊が入ってきたことがある。校舎の占拠封鎖解除だったのか定かではないが、機動隊に抗議するために寮生を集め対峙することとなったが、何事もなく終わった。成立した大学管理法の効果もあってか、全国の大学の運営は正常化し11月の下旬に授業が再開された。授業のない大学という異常な事態の終焉に何となく皆がほっとした気分であった。

- 再開直後、今でも記憶に残る忘れられない授業があった。渡辺金一教授の経済史概論である。私の読書録の36冊目に「カールレービット著『ウェーバーとマルクス』未来社」が記録されていて、この本について当時の私のコメントがある。

春先に渡辺金一教授が経済史概論の授業で紹介し、購入したのが5月中旬。それから今日まで本棚の中に眠っていたのであるが、11月24日の授業再開とともに教授は、これまでの大学の状況に関して自己弁明をした後で、今一度『社会科学とは何か』という問題に立ち返られた。それは近代市民社会に特有の学問である。しからばその近代市民社会とは如何なるものか。それはすぐれて経済的なもの、つまり資本主義社会である。この資本主義社会の問題・本質を、ブルジョア的社会学とプロレタリア的マルクス主義の相異なる立場から追求したのが、ウェーバーとマルクスである。

- 渡辺教授としては長いストライキ期間中の学生との議論の中で、学生から提起された「学問とは何か」「何のために社会科学はあるのか」等の本質的な問いを授業再開一番に学生と議論したいと思ったのだろう。社会科学を学ぶ基本姿勢について大教室ほぼ満席の学生と真摯な議論が展開された。

- 1年次の成績評価はどのようにしたのか。何せ授業は通常の半分以上しかしていない。レポート提出、通常試験、簡易試験など単位認定に関して様々な工夫がなされた。多くは



レポート提出だったが、荒憲治郎教授の経済原論は上級公務員試験の一次試験の形式で行われたし、大成節夫教授の数学概論は教科書の範囲を指定して自学自習、通常の数学の試験が行われた。学生の一人が、他の科目と同様レポート提出を求めたが、安易な方法を求めていると知っていた大成先生は「君たちに数学のレポートなど書けやしない」と一蹴した。「確かにその通りだ」と学生も納得した。

(3) 前期での思い出の授業とゼミナール

- 過去の歴史から見て、圧倒的に授業数の少ない我々であったが、思い出に残る授業は数々あった。経済史概論の渡辺金一教授、数学概論の大成教授はすでに述べた。経済原論の荒憲治郎教授の授業は大教室で受講者は満員であった。中山伊知郎先生直系の先生と聞いていたが、公務員試験の試験委員も担当されていた。結果的に公務員となる人が多く出た年次であったから、受講者も多かったのかもしれない。授業の中で「他の事情において等しければ、*ceteris paribus*」と何度も言われて、我々新入生は、ラテン語の雰囲気とともに、近代経済学の留保条件を感じたものである。ヘーゲル研究の泰斗である上妻精講師は前期で倫理学を教えておられた。授業が終わった後よく教壇から降りてこられ学生と議論されていたが、唯心論の立場から「意識が存在を規定する」とされるので、一度逆らったことがある。想定以上の怒りを買った覚えがある。統計概論の宮川公男教授の試験は面白かった。「時間内には到底全問は解けない数の問題を出すので、制限時間内にできるだけ解くこと。多く解けば解くほど成績は良くなる。持ち込み可で何を見てもよいが人の面倒だけは見てはいけない」というものだった。実際20問位出題されたが、出題順序に従って10問位解いた。

- 前期課程でもゼミナールを選択することができた。近代経済学の基礎を学びたいと思っていたので、財政学の大川政三教授のゼミに入った。大川先生は当時後期課程でMusgraveの*The Theory of Public Finance*をゼミの教科書とされていたが、その前提となるマクロ経済理論を前期ゼミ(2年生)で教えておられた。テキストはDernbergの*Macroeconomics*(マクロウヒル)で、週一回、レポーターを当番制で決めて、報告を受けて皆で議論した。

- ゼミテンには、その後各界で活躍した人がいた。経済学者(東大教授)の伊藤隆敏、大蔵省に行った金田勝年(のち政界に転じ法務大臣)・塚原治、外務省に行った鹿取克章、日銀の吉国真一、運輸省に行った星野茂夫等である。このゼミは比較的よく勉強した方だと思ふ。

4. 国立(3年生・4年生)での生活

(1) 宮沢健一ゼミナール

- 後期進学に当たってのゼミ選択時に考えたことは、マクロ経済学の先生につこうということであった。そもそも経済学部を専攻した問題意識は、国民経済を豊かにして皆が幸福になるための政策について勉強したいということであった。マルクス経済学を専攻した



諸君の一部は、この資本主義社会の中ではそのような政策はありようもなく社会主義革命しかないとの主張であったが、大学入学後ケインズ経済学に触れた私はケインズ型の財政金融政策こそ、人間が経済をコントロールできる方法であると確信するに至っていた。「国民所得理論」の著書もあり、又、産業連関分析の泰斗であった宮沢健一先生のゼミを志望した。

- ゼミに入るために試験があった。一冊の本を選んでその書評を書きそれを材料に個人面接を受けるのである。私は J.K. ガルブレイスの「豊かな社会」を選んだ。資本主義・近代経済学の原点である「消費者主権」が蔑ろにされる可能性（依存効果）について対話があり、ガルブレイスの「新産業国家論」についても読むように言われた。ちなみにゼミが始まってから、先生はこの書評をゼミテン間で交換させ、それぞれが割り当てられた他ゼミテンの選んだ書物を読み、その書評の評価をすることとなった。

- ゼミのメンバーは 15 人。卒業後の就職先を見ると、メーカー 3、商社 4、銀行・金融系 7、公務員 1 の構成であった。ゼミのテキストは、ボーモルの「経済動学序説」と、もう一冊著者名は忘れたが産業連関分析の原理を平易に解説したもの、いずれも原書講読ということで、毎週一回レポーターを決めてレジメを作成させ、議論した。並行してミクロ経済学も学びたいということで、大学院生の松水先生や武蔵先生にチューターになって貰い、ヘンダーソン・クオントの「現代経済学：価格分析の理論」（小宮隆太郎訳）をテキストにサブゼミも行った。

- 4 年生になってからは、各自が卒論テーマを決めて、その目次・概要、中心となる概念・ロジックなどの発表が始まった。15 人なので結局一人 2~3 回発表の機会があった。私は、経済理論が実際の政策に応用されて国民の生活が豊かになる、そのロジック・実例に興味があったことから、アメリカケインジアンが国の経済運営に影響を与えた、ケネディ時代のアメリカ経済を題材にしたいと考えた。2 年生の大川ゼミの夏休みの宿題で、「GDP に関する一冊の書籍を選んでその書評を提出せよ」と言われた時に読んだのが、セイモア・E・ハリスの「ケネディ時代の経済：ニューエコノミックスの実験」（サイマル出版）であったことも契機となった。卒論の題名を「ニューエコノミックスに関する一考察～その光と影～」とした。

- 誕生後、異端の経済学と批判されながら、アメリカのニューディール政策、そしてその後の第二次世界大戦への財政出動で必ずしも明確な意識・認識なく結果として政策効果を実証したケインズ経済学であったが、戦後はその理論の精緻化、守備範囲の拡大、そして成長理論への発展と、我々の学生時代はケインズ政策の黄金期であったと思う。スタグフレーションという現象が出てきてその限界が指摘され始めていた時期でもあったが、アメリカケインジアンがケネディ政権のもとに参集し、国家経済運営に知恵を絞る形は、私の「アメリカに対するあこがれ」の一つであった。結果的には、ニューディール政策と同様、正規の財政金融政策の後、ベトナム戦争の激化とともに戦時経済的なインフレになっ



ていき、スタグフレーションの現出となりフィリップス曲線（物価上昇と失業率のトレードオフ）などが認識され、この曲線をシフトさせるための所得政策など規制的な手法も出てくるのであるが、それらを「光と影」として纏めたものである。4年生の最後の頃、ゼミの幹事もしていたので別件で伺った時か、あるいは卒論を直接提出に行った時か、記憶は定かではないが、宮沢先生に「先生はニューエコノミクス、ケネディ時代の経済をどう思われますか？」と伺った。細かなことは言われなかったが、「経済学者、経済理論が政策構築過程に入っていったことに大きな意義があると思う」と答えられた。

(2) 後期授業等

- 前期の社会科学方法論の議論、経済理論と政策形成との関係の議論を通じて、「価値観と理論」の関係が私にとって大きな興味の関心となった。「ウェーバーとマルクス」から始まり、近代経済学とマルクス経済学の異なった理論体系ができたこと、そして、近代経済学の中でもその歴史的背景の中での価値観の相違が異なった理論を育てることに興味を持った。古典派 マルクス経済学 新古典派 ケインズ経済学 マネタリスト 等々、美濃口武雄教授の経済学説史の講義は本当に興味をもって聞くことができた。如何なる理論もその学者が生きた時代、歴史、そして個人的な経験・価値観に制約されており、その意味で相対的である。したがって、よって立つ価値観を徹底的に明らかにしそれを認識すること、そのことによってのみ、当該理論の客観性が担保されるということを実感することができた。私がどうしても好きになれなかったのはミルトン・フリードマンのシカゴ学派であったが、それはその価値観が理解できないからであった。我々の卒業後、むしろシカゴ学派が新自由主義・マネー重視の流れの中で主流派経済学となるのであり、世の中はわからないものである。

- 後期の授業はストライキが基本的になかったこともあって、充実したものとなった。宮沢先生の日本経済論、山澤逸平教授の国際経済論、板垣與一教授の経済発展論、塩野谷祐一教授の環境経済論、大川政三教授の財政論、長沢惟恭教授の金融論、南博教授の社会心理学等々、授業は無欠席だったと思う。又、こまめにノートをとっていたし時々読み返しては解説などを加えたり、授業の論理をフォローしてメモを加えたりしていた。私のノートは仲間内で結構有名になったらしく、試験期になると寮生以外の見知らぬ学生が私の部屋を訪ねてきて「ノートを貸してくれ」と言ってくることもあった。又、誰かが生協でコピーしたものが出回ったりもした。

- 成績は、決して悪くはなかった。学園紛争という異常な時期で一年次は、授業・試験もままならず評価自体も例年に比べてだいぶ甘くなっていたこともあっただろうが、4年間を通じて「良」が一年次の政治学と化学の二つのみで、あとは全て「優」であった。卒業式には、経済学部卒業生総代に指名され、当時の都留重人学長から壇上で卒業証書を受け取った。経済学の知識・読書量などが一番であるはずはなく、大学の事務に聞いたら「優」の数だけで決めたといわれた。何故そんなに「優」がとれたのか、これだけは何かの間違



いではなかったかと、今でも思っている。

(3) 世相を反映した思い出

< 蓼沼謙一 学生部長 >

・ 学園紛争の時代であった。学生の自治会と対峙する教授会や個々の教授の対応も相当大変だったと思う。何せ会社の労使交渉とはわけが違い、相手は大学運営に基本的に責任のない学生である。交渉の場にいたわけではないので詳細は不明であるが、対応する教授には相当のフラストレーションがかかったことは事実である。前期か後期か忘れたが、夜、学生部から交渉経緯について発表があるというので出かけた。当時の学生部長は労働法の蓼沼謙一教授（現蓼沼学長の御父上）で、たしか労働法か法学通論の授業を担当され私も受講していたと思う。つい2・3週間前までは黒髪だった頭髮があつという間に真白になっていて、驚いた記憶がある。大学運営に責任のある学生部長として学生との交渉にあたり、ご苦労されたのだと思う。全国の大学が同じような状況だったことを考えると、同様な事例がかなりあったのではないか。

< 馬場啓之助 学長 >

・ 国鉄の分割民営化の前の時代である。4月には必ずと言ってよいほど国鉄の労使交渉があり、国労・動労のストライキがあつて鉄道が止まった。多くの通勤・通学客が足を奪われ、この期間は大変な苦労を強いられた。3年次の4月だったと思うが、当時の馬場啓之助学長が公労委の委員長で最後の調停に入っていたが、最終回が本学の入学式の日につかり、入学式を欠席して公労委を開けば一日ストライキ解除が早まり国民の足の混乱は一日早く解決するがどうするか、という状況に至った。我々学生は公共性からして入学式は欠席して、誰かが代理で式辞を述べても仕方がないと考えていた。ところが、馬場学長は入学式に出席することを決め、スト解除を一日遅らせる方を選択した。結果、国民はもう一日通勤・通学に苦労しなければならなかった。翌日の新聞には賛否両論があつたが、馬場学長は、「学長という大学組織の長として、自分たちの後を継いでくれる組織の新しいメンバーが入ってくる時に、その場に存在しないということはありません。入学式出席は議論以前の話である」と敢然と言い切っていたのである。大学であれ企業であれ、組織運営の基本を学んだような気がする。

< 都留重人 学長 >

・ 都留重人学長は、サミュエルソンの「経済学」の訳者であり、第一回の経済白書の執筆者として有名な方であるが、卒業式の学長式辞で話されたことを覚えている。当時は公害問題が大きな社会問題であった。現在の地球環境問題ではなくて NOX、SOX、粉塵、水銀汚染等のいわゆる公害である。4大公害裁判（水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそく）について、「被告企業のトップは全て本学の卒業生である」と切り出された。「個人の立身出世・栄達とその所属する組織が社会的に有意な機能を果たすか否かは別問



題である。このことに注意して今後の人生を送れ」ということだったと私は理解した。昨今のコンプライアンス問題に通じる話ではなかったか、と思う。都留先生は一度中和寮に来られ、食堂で寮生を前に話をしてくれたことがある。この時の話の内容は全く覚えていないが、桜の季節であったろう。来る途中、2〜3輪の花がついている桜の枝を一本おってきてそれを指示棒として使って話したことは覚えている。

5. ラグビー部での活動

- ・私は一橋大学ラグビー部に4年間所属し4年生の時は主将も務めた。ラグビーとの出会いは秋田県立秋田高校に入学したとき、入学式で時の学校長の「学業とスポーツの両立を目指せ」との式辞に感銘したからである。進学校ゆえの練習時間の制約から、当時のラグビー部監督はあえて「1時間練習」を基本コンセプトに効率的な練習法を工夫し、秋田地区の強豪伝統校である秋田工業を破り、2年生と3年生の時に花園での全国大会に出場しそれぞれ準決勝・準々決勝に進んだ。一年間浪人して、一橋大学に入学し入学式当日の先輩の勧誘に応じて入部したのである。

- ・一橋大学ラグビー部は1922年の創部でもうすぐ100周年を迎える。関東では慶応・東大・早稲田に次ぎ4番目に創部され、日本ラグビーフットボール協会の会長やレフリースァエティの委員長を輩出した名門である。戦前は関東七大学戦を形成し、強豪の一角を占めていたが終戦後、部活動の復活が遅れ、私が入学した当時は、戦前定期戦を持っていた明治・早稲田・東大などが既に、対抗戦グループを編成してリーグ戦を行っていたのに対し、一橋大学は加盟することができず、東大との定期戦、国公立戦、そして三商大戦等が中心となっていた。

- ・ちなみに、その後多くの先輩たちの努力と、戦前七大学戦等でともにプレーをした明治大学の北島忠治監督の後押しを頂き、1985年に対抗戦グループに復帰した。1997年には、それまで一つのグループだった対抗戦グループは大学数の増加に対応して、その実力に応じて、早稲田・慶応・明治等のAグループと東大・一橋・明学・武蔵・成城・学習院・上智・立教のBグループに分かれ、現在に至っている。

- ・私が在籍していた当時は、部員は30名ほどで、ほとんどが各県の進学校で体育の授業やクラブ活動でなにがしかのラグビー経験を持っていた。ラグビーボールに触るのが初めてという人は少なかった。練習は国立の中和寮横の専用グラウンドで午後3時半から5時半までの二時間程度。コーチは特におらず時折先輩が来て激励する程度であったが、私が4年生で主将を務めていた時は、それまで病氣療養をされていた昭和8年本学卒で日本協会のレフリースァエティ委員長、関東ラグビーフットボール協会会長も務められた品田通世さんが殆ど毎日指導に来られ、早稲田流の接近・展開・連続のラグビーと、英国流のラグビースピリットや原典を踏まえたルール解説など、質の高い教えを受けた。合宿は5月に国立で新入部員歓迎合宿を5日間程度、8月夏休みに長野県菅平で10日間程度行った。



- 練習は過度に厳しくもなく、さりとして楽でもなかった。合理性を重んじ、主将は毎週一週間の練習計画を紙に書いて品田さんに見てもらい部室の壁に貼りだして部員と共有した。体育会特有の先輩後輩の縦の礼儀はあったものの、部内での上下の議論はかなりフランクで、軍隊流のシゴキなど全く無縁であった。卒業した先輩もよく現役の面倒を見てくれ、夏合宿前には合宿費用にあてる OB 会費を貰うため、部員が手分けして丸の内などの先輩のオフィスを訪問した。お邪魔した時は見ず知らずの後輩でも、昼食やコーヒーをご馳走になり部の歴史を聞くことも多かった。毎日の練習後、上級生・下級生と近くの焼き鳥屋で飲むビールは美味しかったし、定期戦後は必ずファンクションと言って両校の懇親会があった。最後は両校の部歌を歌い Three Cheers のエールを交換してお開きとなった。

- ファンクションの最後に歌う一橋大学ラグビー部歌は、創部時代の先輩がスコットランド民謡の一節からメロディをとり、自分たちで詩をつけたものである。最後のエールの交換時、Three Cheers の後にわがチームは必ず Honor is equal. と叫ぶのが伝統であった。他の大学にはなかったし、ラグビーの母国等外国でもあまり知られていない。意味はトライした人だけでなく、スクラムを支えた人、パスをつないだ人、タックルをした人、それぞれの役割は違っても皆受ける「名誉は等しい」という、チームワークの神髄を表した言葉である。恐らくは一橋大学ラグビー部の先輩の誰かが、ラグビースピリットを端的に表すフレーズとして考案し、伝統化したものと思う。素晴らしいことである。

- 肝腎のチームの強さであるが、私の 4 年生の時は、東大とは 1 勝 1 敗、国公立戦では準優勝、三商大では優勝、現在の対抗戦 B グループ各校との非公式対抗戦は実質的に中位クラスと言った所であった。特に春と秋、年二回行われた東大との対抗戦について言えば、私は 1 年次から全試合、4 年間で 8 試合出場したが、戦績は 3 勝 5 敗だった。2 年生の春は戦後初の勝利であったし、4 年生の秋は、先方には 4 年前の入試中止のために 4 年生がいなかったこともあり 51 vs 3 の大差で勝利した。先輩が非常に喜んでくれて後日如水会館で特別の祝賀会を催して頂いた。「一橋が強いのではなくて東大が弱かったのだろう」などと話す意地の悪い先輩も、喜んで出席してくれた。

6. 就職事情と就職活動

- 学園紛争の時代ではあったし、公害問題、円の切り上げなど日本経済の成長抑制要因はあったものの、1973 年秋の第一次オイルショックまでは、時の田中角栄首相の日本列島改造論などもあって、日本経済はまだまだ成長軌道にあり、雇用状況は完全に売り手市場であった。就職活動期間の制約、経団連での申し合わせなどはまだなかったのではないかと。3 年生の秋ごろから企業側から声がかかり国立のスナックで個別会社説明などがあった。会社回りも 3 年生の 12 月から年が明けて 2 月頃までで、4 年生になる前の 3 月には内定が出ていた。所謂青田買いの最盛期であった。一人で複数社の内定を取る人もいて、3 年上のある運動部の主将は 9 社から内定を貰ったなどという話を聞いた。真偽は定かではないが当



時の雰囲気からするとあってもおかしくないことではあった。

- 我々の年次も複数社から内定を貰い、あとから断りに行く人も多かったが、東大入試がなかった年次でもあり、内定を貰ってから4年次の6~7月に公務員試験、司法試験をうけて結局民間はすべて断るといった人もいた。結果的に中央官庁や法曹界に進んだ人が多い年でもあった。

- 私はラグビーのご縁で東大ラグビー部OBの方の誘いもあり新日鉄に決めた。実質的な内定は3年生の3月上旬だったと思う。今更成熟産業である鉄鋼業に行くのかといった周囲の声はその頃もあったが、鉄鋼という基礎産業の強さが日本経済の強さの源であり、日本経済を支えるという「鉄は国家なり」の思いがあったのは事実である。しかし、それよりも、採用活動時に会った先輩社員の常に国民経済を考える「器の大きさ」とどの人からも感じる「包容力」といった人間的側面で決めてしまったことは否めない。結果論であるが、選択は正解だったと思っている

7. 一橋大学への感謝と期待

- 全国的な学園紛争の中で大学生活を始めた我々の世代であった。戦前の学徒動員の時代を除けば在学中に受けた授業数は歴史上最も少なかったのではないかと。ただ「大学は何のためにあるのか」「社会科学はどうあるべきか」など基本的・根源的な議論に未熟ながらも読書と議論で取り組んだ事は、必ずしも無意味ではなかった。

- 価値観と認識、論理の重要性、価値観と理論の区別、歴史・理論・政策の関連性など、社会科学を学ぶ上での基本的なコンセプトには触れることができた。すべての理論(論理)にはその背後に特定の価値観があること、価値観なければ認識・理論なし、自らの価値観を研ぎ澄まし厳しく自己認識するところから認識の客観性が成立すること、その意味ですべての理論は相対的であり何よりも歴史の制約から免れることはできないことなど。これらの事を学ぶことができたと思っている。

- 企業人として、特に人事・総務の仕事が長かったが、企業人に必要な能力は skill と attitude であると考えます。skill とは知識・技能・技術であり、attitude とは問題に立ち向かう態度、ものの捉え方・考え方である。企業の内外の課題・問題をどう認識するかは attitude の領域であり、attitude がしっかりしている社員は、その問題の解決のための方策・理論(skill)も明確に打ち出すことができる。持っている既存の skill(知識)も attitude がしっかりしていれば活用の幅・深度が違って来る。個々の社員の総合能力はこの両者の掛け算・積である。どちらかがゼロであれば他方がいくら大きくてもゼロなのである。attitude と skill の関係は、社会科学の方法における価値観と理論の関係に似たところがある。企業に入ってほぼ50年になるが、skill と attitude の多くは入社後実務の中で身につけた。しかし、attitude の種火を得たのが一橋大学であったと思うのである。

- 当時の国立大学の授業料は月額 1,000 円であった。当時でもそんなに高いものではな



くむしろ安い感じであった。学生寮も寮費は安く贅沢を言わなければ学生には十分だった。私は国（日本育英会）の奨学金月額 8,000 円、民間（旭硝子奨学会）の奨学金月額 12,000 円、親からの仕送りは僅少で、あとは家庭教師のアルバイト（月額 10,000 円）で生活したが、それでもラグビーもやり、人並みに酒も飲んで、優秀でまじめな友人と議論をして、一流の学者の講義を聞くことができた。このシステムがなければ恐らく今の私はない。

- この経験から今の大学教育を考えたい。必要な能力と意欲のある学生は、家庭の所得にかかわらず優れた大学教育が受けられることが大切である。一橋大学の偏差値は我々の時代に比してかなり上がっていると聞く。しかし、出身高校は関東 4 都県に集中し、中高一貫の所謂エリート校出身者が多くなったとも聞く。そのこと自体は喜ぶべきことかもしれないが、価値観の多様性が社会科学的認識の根源であるとするならば、学問を進めるうえで決定的な、問題意識の持ち方や、課題・テーマの設定能力といったものが、小振りになってはいないかが気になるところである。ぜひ高校、地域、家庭の経済状況など、多様性が確保されて、能力・意欲に優れた学生が学べるシステムを構築して頂きたい。

- 指定国立大学となったことは喜ばしい。しかも世の中の動きである、IoT や AI 等のデジタル・トランスフォーメーションに対応して、データサイエンス学部の新設も予定されている。AI を装備した社会科学研究大学には多くの研究成果が期待される。ただそうであればあるほど人間に期待されるのは、価値観・価値判断である。どういうデータに着目するか、どういう相関関係に着目するか、人間の存在をどこまで残すか、必要なのはリベラルアーツ、教養、人間性ではないか。一橋大学を卒業した公認会計士、弁護士は教養・人間性において一味違うと言われることが多いと聞く。我々の先輩も商法や会計学を学ぼうとして、法律全般、経済学、社会学まで守備範囲を広げた。企業経営がわかるためには政治・経済・社会がわからねばならないので当然である。そしてデータサイエンスまで足を延ばしたわけである。今こそ、リベラルアーツ、教養教育、いわゆる「一橋的教養」の更なる充実を期待したい。

